

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本列島旧石器時代の陥し穴猟

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001996

日本列島旧石器時代の陥し穴猟

佐藤 宏之

東京大学大学院新領域創成科学研究科

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 はじめに | 5.3 前半期型陥し穴猟 |
| 2 旧石器時代の陥し穴の分布 | 5.4 縄紋期の陥し穴猟との違い |
| 3 陥し穴の形態的特徴 | 6 後期旧石器時代後半期—ナイフ形石器文化期 |
| 4 陥し穴の配置 | 7 後期旧石器時代末期—細石刃石器群期 |
| 5 後期旧石器時代前半期—第Ⅲ黒色帯期 | 8 縄紋期陥し穴猟への展開 |
| 5.1 前半期と後半期の間隙 | |
| 5.2 陥し穴の狩猟対象 | |

1 はじめに

500万年の長さにおよぶ人類史は、自然環境に应答してそれを巧みに利用してきた人類の歴史でもある。人類の主要な生業のうち、狩猟の果たした役割は決定的である。その理由は、基盤的生業としての重要性に限らず、ヒト化の過程と現代人の出現プロセスに、きわめて大きな影響を与えたからである(渡辺 1985; Isaac 1989; ウォーカー他 2000; 木村 2001)。人類進化の過程では、植物質食料に特化したパラントロプス属のような人類種もいたが、いずれも後継種なしに絶滅したと考えられており、狩猟の組織化・高度化を達成した系統の中から、現代人が分化してきたと考えられている(佐藤 2000b)。

このように先史時代の生業のみならず、文化・社会の発展を知る上で、狩猟研究は決定的な意義をもつが、それに比べて、このプロセスを検討できる考古学的資料はきわめて少ないのが実情である。日本列島においても、この傾向は同様であり、質量ともに保証された資料としては、陥し穴と考えられる土坑が、ほぼ唯一の例外となっている。これまで行ってきた筆者の狩猟システムに関する一連の研究の一つの柱は、この陥し穴に焦点を当てて、日本列島に展開した陥し穴猟の実体を素描し、そこから照射される狩猟社会の変遷を探求することにあつた(佐藤 1989; 1990; 1993; 1996; 1998a; 1998b; 1998c; 2000a; 2000b; 2001; 安齊・佐藤 1993; 1996; 佐藤・田口 2001)。ただし、考古学資料として現れた陥し穴だけでは、陥し穴猟という狩猟システムの全体像を復元・解釈することは困難である(渡辺 1993; 2001; 佐藤 2000b)。そのためには、狩猟を取り巻く民族考古学的研究が必須となる。したがって、考古学資料としての陥し穴と民族誌または報告者自身の民族考古学的な研究成果を総合的に検討し、日本列島に展開された罾猟としての陥し穴猟の実態を解釈する必要がある。

これまでの筆者の研究は、縄紋時代を射程にしたものが中心であった。縄紋時代は、陥し穴猟が最盛期となる段階である。しかしながら、その前段階である旧石器時代においては、どうであろうか。50数年に及ぶ日本の旧石器時代の研究史の上では、早くから住居・墓・炉等の遺構研究が注意されてきたが、陥し穴を含む土坑の検出例は、80年代後半以前はきわめて少なかった。80年代後半になると、それまで大都市圏周辺に限られていた大規模調査が列島各地で行われるようになった。同時に、台地縁辺の湧水地周辺のような生活痕跡（石器集中や礫群等）の存在が予想可能な空間以外に、陥し穴のような、本来日常的な活動生活の痕跡に伴わないような遺構が分布すると予想される丘陵地等の範囲まで調査がおよぶようになった結果、ここ10数年で急激に資料が増加したのである。

それでも、縄紋時代の陥し穴研究史同様、初期の研究段階では、これらの土坑を生活痕跡に付随する貯蔵穴と考える説（山下 1985; 1989; 鈴木 1980; 1996a; 1996b）が有力であった時期もあったが、後述する静岡県初音ヶ原遺跡の調査をきっかけとして、陥し穴であるとする説が有力となり陥し穴研究が本格化した。本論は、こうした研究の現状を受けて、縄紋時代に陥し穴猟が盛行する前段階での陥し穴猟の実態を検討する。特に従来旧石器時代の遊動生活から縄紋時代の定住生活への移行として公式的に喧伝される対立的な視点に対し、本来定着的な生業システムである陥し穴猟を通じた検討を加えてみたい。

2 旧石器時代の陥し穴の分布

日本列島で見られる最古の陥し穴猟の証拠は、後期旧石器時代前半期に遡ることができる。陥し穴の最盛期である縄紋時代には、推定100万基以上の陥し穴が、全国各地から報告されているが、これに対して、旧石器時代の陥し穴は34遺跡から240数基程度が現在知られているにすぎない。

現在報告されている旧石器時代の陥し穴を中心とする土坑の検出例は、宮城県下の2遺跡を最北の例として、群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県・静岡県といった関東～中部地方南部と、福岡県・宮崎県・鹿児島県の九州地方の3地域で知られている（表1）¹⁾。旧石器時代の陥し穴土坑は、東北南部、関東～中部地方南部、および九州の3地域に離散的に分布しているが、1遺跡から1基のみ検出される例は全体の1/3程度で、残りはすべて複数基検出されている。どちらかといえば、東北および神奈川県を除く関東では、1遺跡あたりの検出数が1基ないし少数基にとどまるのに対して、神奈川県～静岡県と九州では1遺跡から複数基検出される例が多い。特に、静岡県では、10基以上検出されている遺跡が多く、最大級の初音ヶ原遺跡では、総数にして60基以上検出されている（鈴木 1999）。また、最近になって、南九州でも、細石刃石器群期になると、10基以上検出される遺跡の発見例が増加してきた。

旧石器時代の陥し穴は、どうやら西南日本に分布の中心がありそうであるが、関東南部

表1 旧石器時代の陥し穴を検出した遺跡の集成 (2001年7月13日現在, 2002年9月25日加筆訂正)

No.	遺跡名	所在地	立地	時期	層準	陥し穴数	底部施設有	底部施設無	平面形態	断面形態	深さ (cm)	備考	文献	¹⁴ C年代 (BP)
1	青葉山E	仙台市	丘陵平坦面	後期末-草創期		4	0	4	長円形	逆台形	31-99	散在	佐川1986	
2	支倉	宮城県大和町	丘陵緩斜面	後期末-草創期		1	0	1	長円形	逆台形	74		手塚・小川1986	
3	勝保中ノ山	群馬県赤城村	丘陵平坦面端	後期前半	VII?	2	0	2	円形	すり鉢状	160		岩崎1989	
4	大山	埼玉県伊奈町	台地端	後期後半	ハードローム	1?	0	1	楕円形	皿状	30	陥し穴?	浜野・川口1989	
5	ICU Loc. 15	東京都小金井市	台地端	後期後半	IV中	1?	0	1	楕円形	不整U字状	125	陥し穴?	キター他1971	
6	四葉地区	東京都板橋区	台地内	後期後半	VI	1	0	1	楕円形	逆台形	130		依田・大木1999	
7	菅原神社台地上	東京都板橋区	台地内	後期末	III	1	0	1	長方形	筒形	80		伊藤1997	12830-13150
8	長井台地	神奈川県横須賀市	台地内	後期後半	VI	1	0	1	円形	筒形	150		稲村・佐藤1990	
				後期後半	III	2	0	2	円形・楕円形	?+漏斗状	?+84	1基は平面のみ		
9	打木原	神奈川県横須賀市	台地	後期前半	BB 3	9	0	9	円形	逆台形	150-180	2列(各4,5基)	佐藤2002	25270±300, 23810±130, 24380±140
10	久根ヶ崎	静岡県韮山町	台地	後期後半	休場層	1	1	0	円形	逆台形	100	小穴1	小野・秋本1994	
11	初音ヶ原	静岡県三島市	丘陵緩斜面	後期前半	第III黒色帯	60	0	60	円形	逆台形	79-180	4列長大	鈴木1998, 1999	22110±430, 24800±450, 29750±210
				後期後半	休場層	5	0	5	円・楕円・長方形	皿状・筒形	24-110	散在		
12	下原	静岡県三島市	丘陵平坦面	後期前半	第III黒色帯	7	0	7	円形	逆台形	142-176	1列	小野1995	
				後期後半	休場層	2	0	2	円形	筒形, フラスコ状	66,40	岩崎1998		
13	焼場A	静岡県三島市	丘陵緩斜面	後期前半	第III黒色帯	2	0	2	円形	逆台形	110,150		笹原1994	
14	加茂ノ洞B	静岡県三島市	丘陵平坦面	後期前半	第III黒色帯	17	0	17	円形	逆台形	95-139	2列	横山1996	
15	八田原	静岡県三島市	丘陵平坦面	後期前半	第III黒色帯	7	0	7	円形	逆台形	128-136	1列	笹原1997	
16	子ノ神	静岡県沼津市	丘陵平坦面	後期後半	休場層	4	0	4	楕円・長方形	皿・逆台形・筒状	23-77	列状	石川1982	
17	第二東名27	静岡県沼津市	丘陵平坦面	後期末-草創期	休場層	1	0	1	円形260cm	逆台形	185	径巨大	未発表	
				後期前半	第III黒色帯	10?	-	-	円形	?	?	詳細不明		
18	柏葉尾	静岡県沼津市	丘陵平坦面	後期後半	休場層	4	0	4	円形・楕円形	たらい状	35-70	散在	池谷1996	
19	寺谷	静岡県磐田市	台地	後期後半		2	0	2	円形・楕円形	逆台形	80,100		鈴木1980	
20	勾坂中下4	静岡県磐田市	台地	後期後半		2	0	2	円形	筒形	135,120		佐口・室内1995	
21	高見丘Ⅲ, IV	静岡県豊田町	台地	後期後半		10	0	10	円形, 方形	筒形	20-200	散在	富樫1998	
22	広野北	静岡県豊田町	台地	後期後半		17	0	17	円形主+楕円	筒形	45-109	略列状	山下1985	
23	椎の木山	福岡県北九州市	丘陵	後期後半		1	0	1	円形	砲弾状	103		上村1987	
24	垂水第1	宮崎県宮崎市	台地	後期後半		2	0	2	長方形	逆台形・糸巻状	137,152		日高1994	
25	後牟田	宮崎県川南町	台地	後期後半		1	0	1	長方形	筒形	深い		佐藤1999	
26	南学原第2	宮崎県佐土原町	台地	細石刃		2	0	2	長円形	筒形	120,220		日高1995, 2002	
27	別府原	宮崎県西都市	台地	細石刃		18	6(1穴4, 大 P1-2)	12	円形, 楕円形, 長方形	逆台形	深い	形態多様, 施設ありは円形	日高1995	11910±80, 13010±90
28	上ノ原	宮崎県佐土原町	台地	細石刃		26	15	11	楕円・長円形	逆台形, 筒形	21-207		木本1999, 2002	
29	下屋敷	宮崎県佐土原町	台地	細石刃		3	3	0	楕円形	逆台形	98-120		吉牟田1998, 2002	
30	仁田尾	鹿児島県松元町	台地	細石刃		16	多数含む	?	長方形・楕円形	逆台形	90,140	施設は小P大P有	宮田1995, 日高1998	
31	大久保	鹿児島県出水市	台地	細石刃		1	1	0	楕円形	逆台形	90	小P6が1列	日高1998, 岩崎1997	
32	鹿村ヶ迫B	鹿児島県入来町	台地	細石刃		2	2	0	楕円・長方形	皿状	70,13		藤井・今村1997	
33	志風頭	鹿児島県加世田市	台地	細石刃		2		?					上東・福永1999	
34	西ノ原B	鹿児島県松元町	台地	細石刃		2	?	?	?	?	?		日高1998	

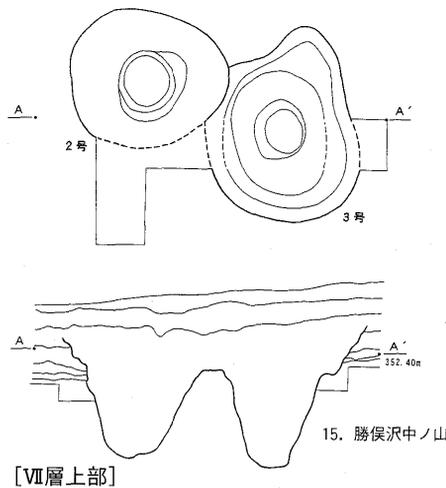
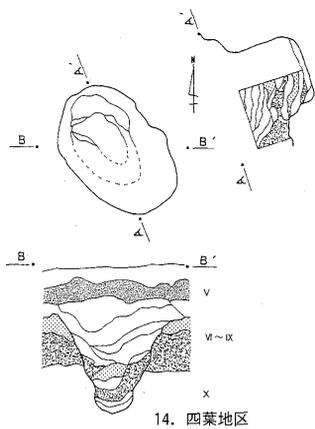
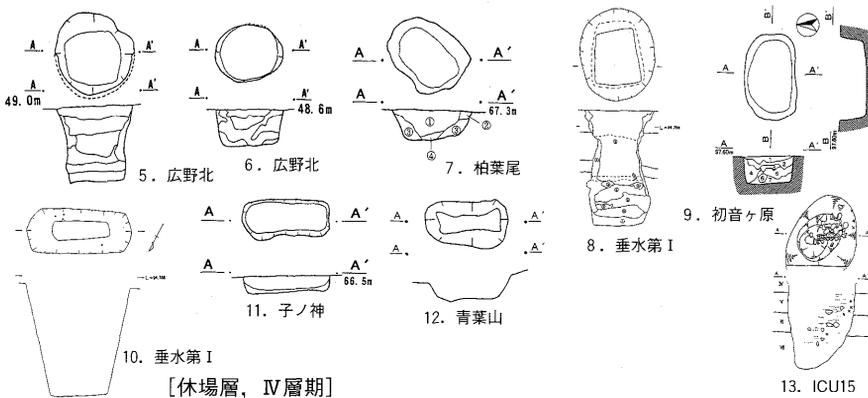
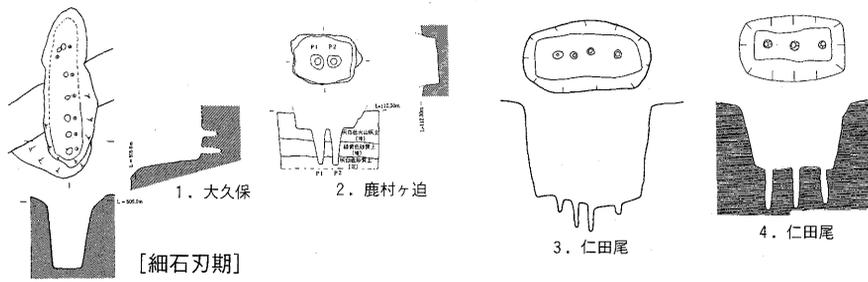


図1 旧石器時代陥し穴の時期的変化 (1/100)

・中部南部と九州の間には、広大な未報告地域が存在しており、現段階では、安易な予測は困難である。すでに別稿で述べたように、縄紋時代の陥し穴は、しばしば居住空間と離れた台地奥部や丘陵・低山地に分布の中心がある(佐藤 1989; 1990; 1998a; 2000b; 2001)が、後期旧石器時代の陥し穴猟の空間利用も同趣の傾向を有していたとすると、この未報

告地域では旧石器時代の調査例自体が少ないので、あるいは調査密度の僅少さや調査地点の偏在が分布の傾向に影響を与えている可能性が考えられる。

3 陥し穴の形態的特徴

かつて山下秀樹は、旧石器時代の土坑を集成し、それを形態上の特徴から、円形で深い「広野北型」(山下 1985) (図1:5, 6), 楕円気味で浅い「子ノ神型」(石川 1982) (同:7, 9), 長方形でやや深い「青葉山型」(佐川 1986) (同:10~12) の3つに類型化した(山下 1989)。その後の資料を加えて再検討を行った鈴木によれば、基本的にこの3類型に加えて、第Ⅲ黒色帯期の円形ではあるが「広野北型」より深いタイプ(図4:3~8)と、後半期に多い「青葉山型」より長狭化したタイプ(図1:1, 3, 4)等を追加可能としている(鈴木 1996b)。現状をみる限りでは、これらの形態分類ではほぼ網羅されていると考えられる(図1)。

旧石器時代の陥し穴の形態的变化は比較的明瞭である。出現当初の後期旧石器時代前半期の陥し穴(図4:下)は、略円形を少数含む円形で深いタイプにほぼ収斂するが、この段階の終わり頃には、すり鉢状のタイプ(図1:15)が出現する。この形態は、後期旧石器時代後半期初頭になるとやや楕円化し(同:14)、やがて円形だけではなく楕円形・長円形・長方形が出現する(同:5~13)。深さも浅いものが現れるようになる。細石刃石器群期になると、円形・長円形・楕円形・長方形を主とするようになり、底部施設²⁾のヴァリエーションの乏しさを除けば、縄紋時代初頭に見られる形態組成を基本的にそろえている可能性が高い(同:1~4; 図5:2の別府原遺跡分布図参照)³⁾。注目されるのは、この時期になると、後の縄紋期で一般的になる底部施設が出現すること(宮田 1995; 日高 1998)で、この時期には縄紋期以降の陥し穴の基本が構造化されたものと考えられる(佐藤 2000b)。

4 陥し穴の配置

旧石器時代の陥し穴は、1遺跡あたりの検出数が1~2基のみという遺跡がもっとも多く、配置が検討可能な3基以上の場合でも、15遺跡程度である。特に、南九州の細石刃文化期でまとまった陥し穴を検出している宮崎県別府原遺跡(日高 1998; 2002) (図5:2)、同上ノ原遺跡(木本 1999; 2002)、鹿児島県仁田尾遺跡(宮田 1995; 日高 1995; 1998) (図5:1; 図1:3~4)については後述する。これら以外に、現在配置性や単位が把握可能な例は、静岡県下の第Ⅲ黒色帯期に集中する(横山・伊林・富樫 1996)。これら陥し穴の配列については、鈴木によって詳しく分析されており、青葉山遺跡(佐川 1986)・初音ヶ原遺跡(鈴木 1998; 1999) (図2)・下原遺跡(小野 1995; 岩崎 1998) (図3:4)・八田原遺跡(笹原 1997) (同:3)の例は、台地の走行に直行し、広野北遺跡(同:6)は平行すると考

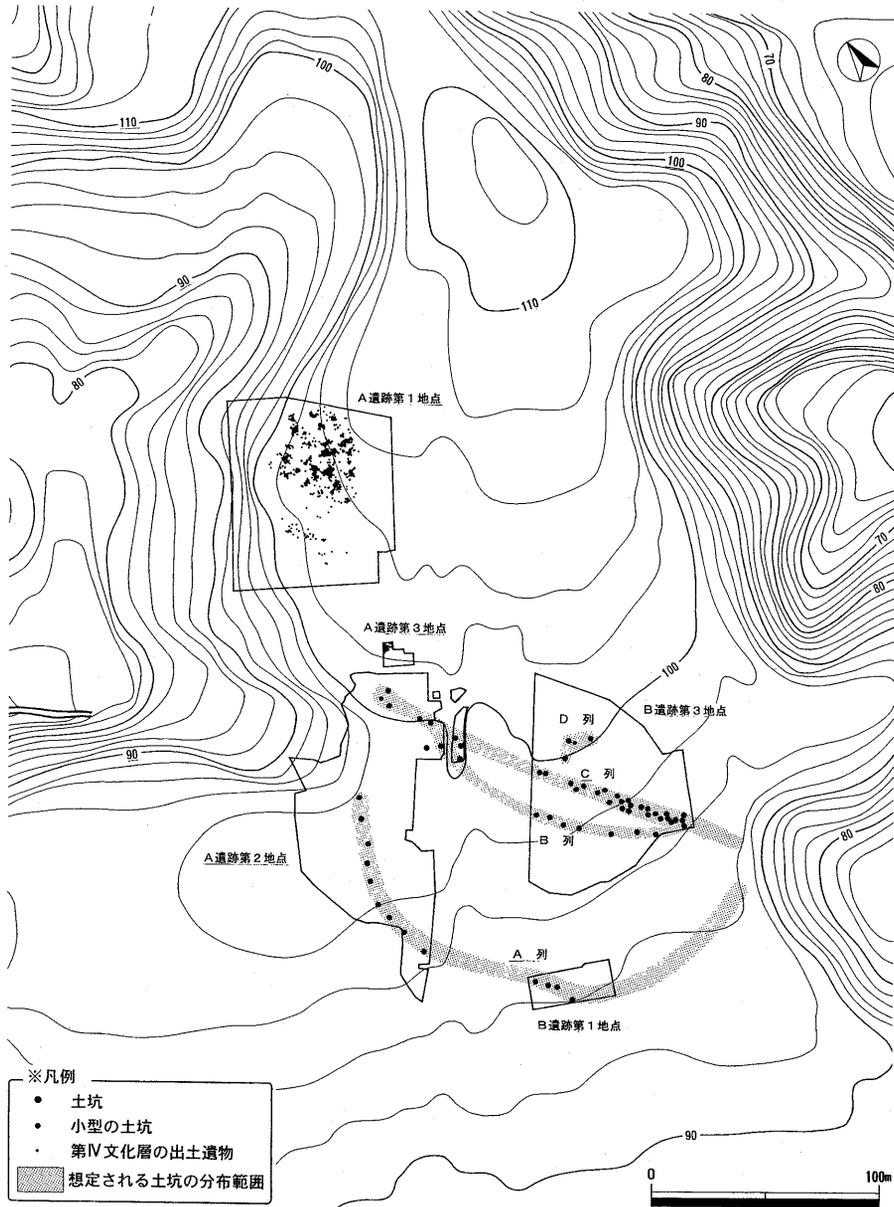


図2 静岡県初音ヶ原遺跡第Ⅲ黒色帯期陥し穴の配列

察されている。また、鈴木は、陥し穴は通常台地あるいは丘陵の縁辺部または中央部にあたる比較的広い平坦面に設けられるのに対して、加茂ノ洞B遺跡(横山 1996)(同:2)では丘陵端部の落ち際という特異な立地に陥し穴が設けられていることに注意を促している(鈴木 1996b)。

しかしながら、鈴木がこの論文が発表された当時はまだ正式報告のなかった(前嶋

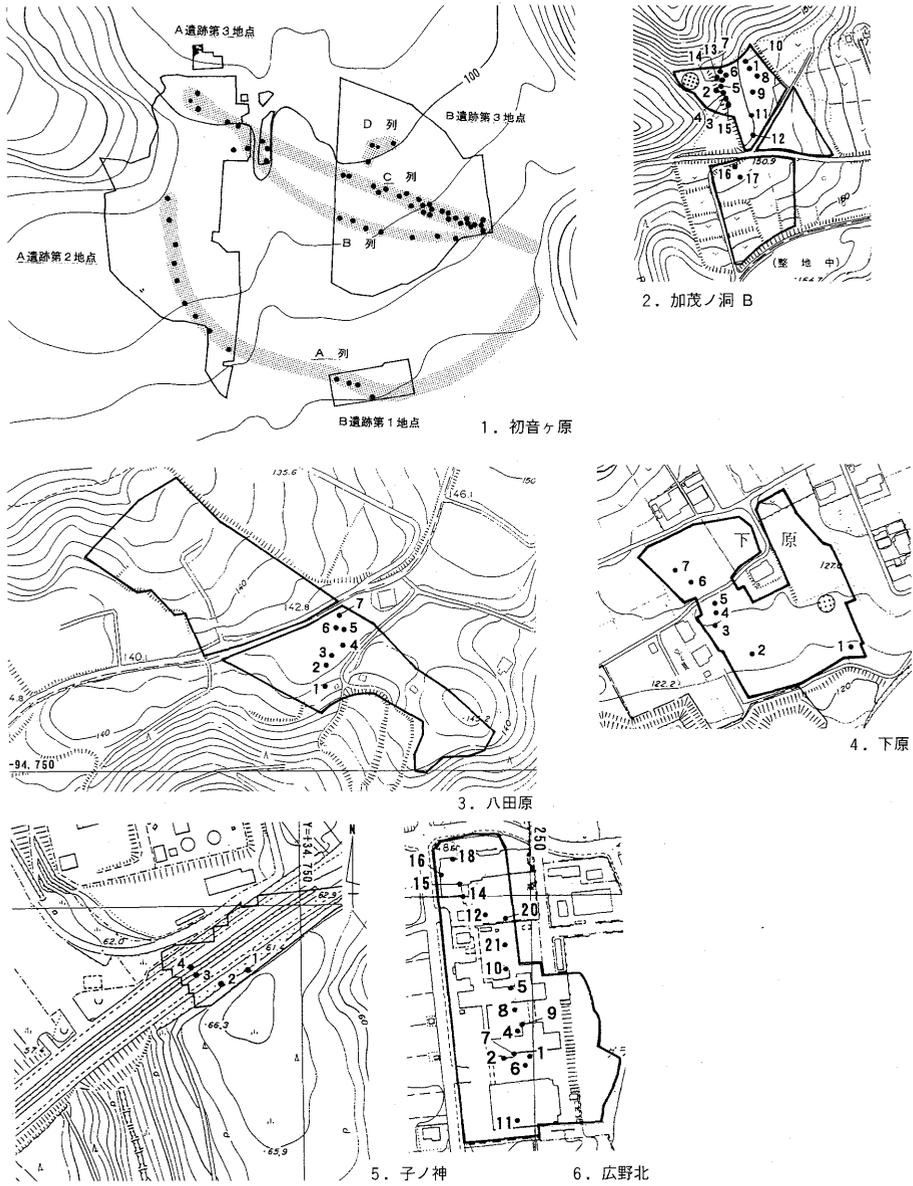


図3 静岡県下の旧石器時代陥し穴の列配置 (1. を除いて1/5000)

1987; 鈴木 1992) 初音ヶ原遺跡の本報告書を見ると、報告者である鈴木敏中は、初音ヶ原遺跡の陥し穴の配列が加茂ノ洞B遺跡の配列ときわめて近いことを指摘している(鈴木 1999: 378)。初音ヶ原遺跡の陥し穴は、調査範囲内だけで60基、推定では100基以上の陥し穴が、少なく見ても150m以上にわたる列を含む4列の配列をもって構築された、従来の予想を大きく上回る大規模な設置方法を有していた(図2)。鈴木忠司の指摘する台地走行に対する方向性(直行か平行か)も、このような長大な列配置を前提とすると、局所的な現

象の指摘であった可能性がきわめて高い。類例に乏しいため予断はできないが、初音ヶ原遺跡を念頭に配置性を検討してみると、陥し穴の列配置は、基本的には設置された台地や緩傾斜丘陵面の傾斜の形に沿った、換言すれば、列の両側部は標高ラインに平行しながらも中央部分では台地や丘陵平坦面を横断するような設置法を採用していた可能性が高い。ちなみに、後の縄紋期の列配置では、台地を横断するタイプと台地や丘陵平坦面の地形変換線付近に、地形の走行方向と平行するように設置するタイプに大きく二分されるが、この両者を併せたような初音ヶ原の列配置は基本的にほとんど見られない。

一方、縄紋期の代表的なもうひとつの配置法である2~3基を一組にする組配置は存在するのであろうか。これも現段階では判断が難しいが、一見組配置のように見える例は、たとえば広野北遺跡や初音ヶ原遺跡のC列を見ると、基本的には列配置の一部である可能性も指摘できる。初音ヶ原遺跡では、列状に群集するC列と、単独基が連続するA列が併走しており、このことからすると、C列のような例は、作り替え（補修・再構築）を反映しているとも考えられよう（図3）。なお、これら長大な列配置を構成している陥し穴の間は、誘導柵によって接続されていたと考えられる（佐藤 1993; 1996; 1998b; 1998c; 2000b）。配列とその方法については、後に再び検討する。

5 後期旧石器時代前半期—第Ⅲ黑色帯期

5.1 前半期と後半期の間隙

現在のところ日本列島の最古の陥し穴は、後期旧石器時代前半期後葉に帰属している。特に、静岡県沼津市・三島市周辺では、古富士火山起源の厚いテフラが堆積しているため、火山灰編年学的分析に好適な環境を作り出しており、その結果、この地域の標準土層堆積でいう第Ⅲ黑色帯期に、陥し穴土坑が集中して構築されていることが判明している⁴⁾。神奈川県打木原遺跡でも同層準から出土しており（佐藤 2002）、関東以北で唯一知られている後期旧石器時代前半期の陥し穴である群馬県勝保沢中ノ山遺跡（岩崎 1989）（図1:15）の例も、武蔵野編年のⅦ層上部段階に対比されるが、これは愛鷹・箱根山麓の第Ⅲ黑色帯期にやや後続する時期である。

その後、東京都四葉地区遺跡（依田・大木 1999）（図1:14）と神奈川県長井台地遺跡群（佐藤他 1990）の各1基が、後期旧石器時代後半期前葉（武蔵野編年Ⅵ層段階）に属することを除いては、「砂川期」まで、陥し穴土坑の製作痕跡は観察されていない。代表的な遺跡である初音ヶ原遺跡第Ⅲ黑色帯に帰属する陥し穴土坑から採取された炭化材の¹⁴C年代測定値は、 $29750 \pm 210\text{BP}$ （本論では非較正年代をBPと表し、暦年較正年代を cal. BPと表す）⁵⁾であり（鈴木 1999）、第Ⅰ文化層の「砂川期」の包含される休場層の年代は、 $14500 \sim 15500\text{BP}$ 頃と推定される⁶⁾ので、陥し穴が細々と作られ続けていた可能性を考慮しても、次の発達期を迎えるまでに約1万年間の停滞～休止期が想定される。

こうした出現の断続性は、他地域でも観察されるようなので、現時点では少なくとも西南日本における一般的な傾向である可能性が高い。ちなみに、辻本崇夫は、細石刃石器群期以前では第Ⅲ黑色帯付近でのみススキ等の草地環境が卓越するとした植物珪酸体分析の結果から、「火山に近いこのような地域では、粗粒で熱を帯びた火山噴出物が多量に供給されたため、それまで成立していた森林相が破壊され裸地化する。その後、植生が復活する初期段階で成立した草地に、陥し穴群が構築された」(辻本 1996: 148)として、植生環境と陥し穴を結びつけて、この時間的間隙を説明した。さらに、鈴木忠司は、第Ⅲ黑色帯の時期が、最終氷期に2回⁷⁾のピークが認められる寒冷期に挟まれた温暖期にあたること、この時期以降、本格的なナイフ形石器群の展開する時期を迎え、陥し穴を含み各種の狩猟法が整備されてきたと推定されること、さらに、植物質食料に依存していた縄文期よりも、相対的に動物資源への依存度が高かったと推定されること等の理由から、第Ⅲ黑色帯期に安定した陥し穴が展開しながらも、「砂川期」まで「断絶する」背景を説明している(鈴木 1996b)。

筆者も、鈴木忠司の議論を基本的に了承するが、大きな問題点があることも確かである。鈴木忠司の説明は列島規模の展開には適用されると考えられるが、静岡県下に集中し他には九州南部や北関東でわずかに見られるという現状の分布的特徴を説明可能な(地域)限定モデルたりえていない。辻本の説明モデルは、一見すると地域モデルの体裁をとるが、植生環境のみからの説明とすると、類似環境は、後期旧石器時代のこの地域と時間にだけ限定されるとは考えにくいことから、十分ではないであろう。

5.2 陥し穴の狩猟対象

前述した鈴木忠司が展開した論には、さらに陥し穴の用途に関する推論が、もうひとつの根拠を提供している。それは、民俗誌の類例に見られる陥し穴の用途がほぼイノシシに限られることを根拠として、この時期の陥し穴の主要な狩猟対象獣がイノシシであったと推定していることで、そのため「Ⅶ層段階(筆者註：=第Ⅲ黑色帯期)ではまだイノシシの生息が可能な環境下にあったと考えることができ、縄文のイノシシは2万年前の最寒冷期に一旦姿を消していたものが、ふたたび登場したということになる。」と考えた(鈴木 1996b: 163)。この説は春成も支持している(春成 2001)。

確かに、民俗誌に見られる陥し穴は、西南日本に多く見られ、その狩猟対象はイノシシであることが多い(高橋 1994)。たとえば、愛知県東栄町下粟代で今でも観察されるイノシシの陥し穴は石積みではあるが径1m、深さ2m前後の円形を呈している(須藤 1991)⁸⁾。高知県長岡郡大豊町尾ケ内例(香月 1995)⁹⁾同様、イノシシの捕獲のポイントは、食肉のための生け捕りにあったようで、そのために深い陥し穴を掘るかイノシシの自由を奪う目的の何らかの工夫¹⁰⁾が施されたと考えられる。

近世以降に西日本を中心に広く認められる猪垣・猪土手は、水田・常畑や焼き畑をシカ

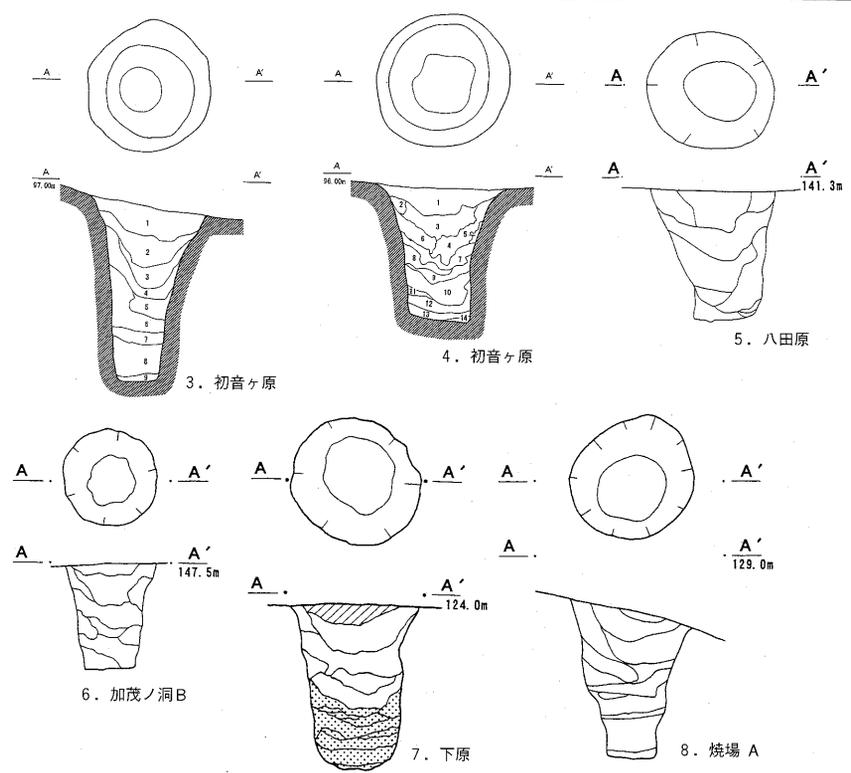
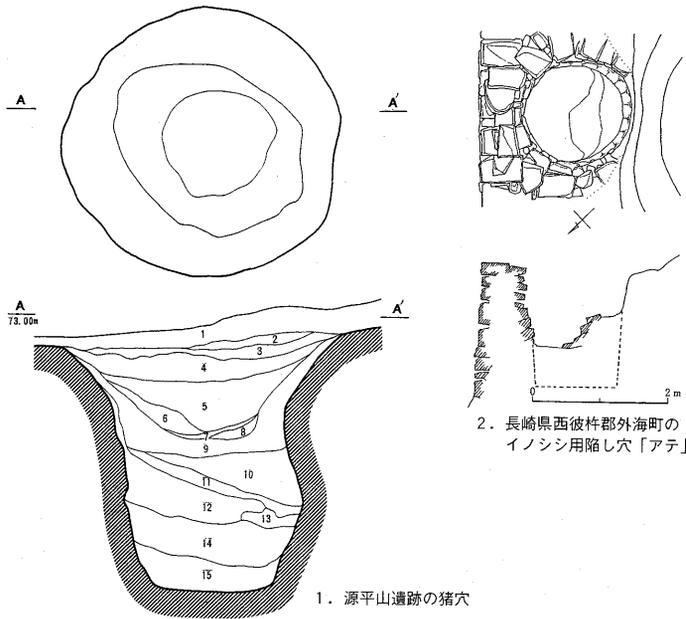


図4 民俗例（上）と第Ⅲ黒色帯期（下）の陥し穴（1/85）

やイノシシなどの獣害から防御するための施設であり、長崎県対馬・五島列島や香川県小豆島等の例は著名である（須藤 1991; 立平 1996; 1997等）し、発掘調査例も多い（雨宮 1997等）。この猪垣・猪土手には、しばしば陥し穴が、垣・土手の切れ目等に設けられ、貴重な獣肉を確保する手段となってきた。三島市夏梅木遺跡群源平山遺跡B・C地点では、猪土手に併設された陥し穴2基が発掘調査されており、円形で径3 m前後、深さ2.5~3 mを測る（鈴木 2000）（図4:1）。規模が大きく内部の空間がやや広いのが気になるが、第Ⅲ黑色帯期の例とよく似た構造を呈しており、文書の記載とも整合するようなので、シカ・イノシシ防御用であったことは確実であろう（加藤 2000）。

以上のことから、円形で深いタイプの陥し穴が、時代を超えてイノシシ用の陥し穴として機能していた可能性は首肯できよう（図4）。しかしながら、第Ⅲ黑色帯期に盛行した陥し穴が、その後列島規模で著しく衰退する主因を、気候変動にのみ求めることは難しい。ダンスガード・サイクルとして知られるように（佐藤 1998; 多田 1997等）、更新世の気候が劇的に変動していることは周知の事実であるから、気候・環境変動が狩猟法に大きな影響を与えたことは間違いないと考えられるとしても、その一方で、縄紋期に見られたように（佐藤 1989）、狩猟を実行した狩猟者の、そして狩猟者を取り巻く集団の社会的・文化的要因の検討もまた必要である。

5.3 前半期型陥し穴猟

鈴木忠司は、第Ⅲ黑色帯期にナイフ形石器が本格的に出現することを積極的に評価し、この時期以降、大・中型獣はナイフ形石器を使用した槍猟で、イノシシ・シカ等は陥し穴猟で、ノウサギ等の小動物はくくり罠等の罠猟でといった狩猟システムが完成したと評価している（鈴木 1996b）¹¹⁾。また、春成秀爾は、後期旧石器時代前半期前葉にのみ出現し通常の生活址よりはるかに規模の大きい環状ブロックを、大形獣狩猟を契機として複数の集団が集まった結果形成された生活址とし、その消滅がナウマンゾウ等の大形獣狩猟の終焉と軌を一にすると考える中で、鈴木の第Ⅲ黑色帯期におけるイノシシ用陥し穴説を積極的に肯定し、後期更新世後半以降ではイノシシが主要な狩猟対象となったと推定している¹²⁾。春成の論点は、3.3万年前にオーバーキルによって大形獣が絶滅したとする野尻湖遺跡群の主張（野尻湖発掘調査団編 1997）に疑義を呈し、環状ブロックが出現し消滅する2.8万年前までは、大形獣狩猟が継続され、そののちは、大形獣からイノシシ・シカ（カトウキヨマサジカ・ニホンムカシジカ）に主要な狩猟対象が移行したとする考えにある（春成 2001）。

環状ブロックが、大形獣狩猟を契機として形成されたとする説（大工原 1990; 1991）の当否は置くとしても、春成も述べるように（春成 2001）、それが集団の紐帯を維持することに重点を置いた活動の痕跡であった可能性は高いと考えられる（佐藤 1992）。換言すれば、集団の同盟関係を強化するために、集合した痕跡であろう。

なぜならば、第Ⅲ黒色帯期に見られるような大規模な陥し穴猟の実行のための社会的条件として、猟場を形成するために一定の空間の占有または優先使用と、隣接集団によるその承認が必要であると考えられる(安斉・佐藤 1996; 佐藤 1989; 1998a)が、ちょうど第Ⅲ黒色帯期(=Ⅶ層段階)は、後期旧石器時代前半期から形成が開始された列島の地域的な単位化が本格化する段階と一致している(佐藤 1992; 2000c)。径3~5m程度の石器製作址からなる個々のブロックが径30~50mの環状に配置される環状ブロックは、後期旧石器時代前半期のⅨ層段階にほぼ限定され、ほんの一部がⅦ層段階の前半にまで残存するにすぎない。いわば、環状ブロック形成の終了と地域の単位化の本格化は時間的に一致する。Ⅸ層段階以前の集団は、人口も希薄で特定の遊動域を占有することなく広範囲に広く重複しながら遊動するため、通常的生活活動では会合しにくい隣接集団との同盟関係を確認するための定期的な会合(たとえば婚姻・共食・祭祀等)の場として環状ブロックを形成していたが、Ⅶ層段階以降地域単位化が進行した結果、隣接集団の活動・居住に関する情報を常に確認することが可能となり、特定地点に環状ブロックを形成するような特別な活動を行う必然性が失われたと考えられる。そして、前半期型陥し穴猟も、このような社会構造の出現によってはじめて本格化することが可能となったのであろう。

民族誌または民族考古学的知見によれば、陥し穴猟をはじめとする罝猟の本格化は、資源開発に対する定着的な戦略の組み込み(=空間利用の計画的占有化)を意味する場合が多い(佐藤 2000a; 2000b)。このことは、特定の占有的な資源開発空間の発生を意味するので、少なくとも、これまで直接採取していた資源のうち、新しく形成された資源開発空間(=領域)外に存在する優良石材・塩・希少必要資源等のいくつかの資源を、交換網等の手段によって補充するような状態が必要となったと考えられる。陥し穴猟の展開の条件には、Ⅶ層段階以降に発達する地域単位化が必然的にもたらす資源開発と利用の構造化と効率化—たとえばその一つには交換網の発達—が必要だった。安蒜政雄の言うように、当該期の関東の集団が、優良石材を産出する赤城山麓までを含む広範囲を往還する広域移動型の生業=居住システムを有していたとしたら、陥し穴猟を本格的に展開することは困難であった可能性が高い(安蒜 2001)。前半期型陥し穴猟が静岡県と神奈川県南部に偏ることは、あるいは地域間での地域単位化(=領域性の形成と地域集団の分節化)の遅速が反映しているのかもしれない。

静岡から神奈川県南部といった地域にのみ特異的に発達する第Ⅲ黒色帯期の陥し穴猟がその後著しく衰退することは、前記したように、LGM(Last Glacial Maximum, 最終氷期最寒冷期)の気候変動要因にのみ帰することは難しい。なぜなら、気候変動仮説は、列島にとどまらない世界規模での気候変動であっていわば一般モデルであるのに対して、第Ⅲ黒色帯期の陥し穴猟には、明らかに地域限定モデルでの説明を要求されるからである。かつて、筆者は、静岡を中心とする陥し穴猟の特異な発達を理解するのにとまどい、その後の資料の増加を待って検討すると言及した(佐藤 1992)が、10年たった今も資料が増加し

ただで、分布の基本的状況には変化は見られていない。このことは、第Ⅲ黒色帯期の陥し穴猟が、地域的現象であることをあらためて証しているものと考えられる。

翻って、当該期の属する後期旧石器時代前半期後葉段階の列島の石器群構造を概観してみても、当該地域にのみ認められるような、特異な石器群構造の分立やスタイルの表象は認められない。したがって、スタイルに表象される程度には地域集団の分節化が確立してはいないが、地域の単位化が進行中である過程で、陥し穴猟を実行可能にするような社会的条件がモザイク状に出現し、その中でも特に条件の整った地域が当該地域であったと解釈できるのではないだろうか。もちろん、その背景には、気候や自然環境条件も付加されるものとも考えられる。

定住型狩猟採集民である縄紋時代とは異なり、遊動型狩猟採集民を基本とする旧石器時代においては、一定空間を長時間にわたって占有せねばならない陥し穴猟の採用条件を整備することは、相対的に難しいと考えられる。現今の気候変動の理解では、氷期の気候環境は、酸素同位体ステージで勘案されていた緩やかな変動¹³⁾よりもはるかに「突然かつ急激に」変動することがわかっている。一方、完新世である縄紋期の気候変動は、更新世とは全く反対にきわめて安定的である。したがって、気候条件の上からも、陥し穴猟を開始する条件が整うことは相当に困難であり、しかもひとつの地域での長期間にわたる継続的な実行を保証することは相対的に難しいことになると予想される。

5.4 縄紋期の陥し穴猟との違い

第Ⅲ黒色帯期の陥し穴猟の特徴は、列配置にある。縄紋時代の陥し穴猟の配置法でも、列配置が主要な配置法であることは前記したとおりであるが、異なる特徴が二つある。

第一に、第Ⅲ黒色帯期の陥し穴猟を構成する陥し穴の形態は円形であるが、これは縄紋期の列配置では一般的ではない点である。第二に、前述のように、縄紋期の列配置では、台地や平坦面を横切るか地形変換線に平行して配置するのが普通なのに対して、第Ⅲ黒色帯期の陥し穴猟では、この両パターンを接続した形となっている点である。

縄紋時代の列配置法は、縄紋期陥し穴猟の発達過程の後半段階（縄紋時代中期以降）に顕著になるのが一般的で、特に東日本で発達し、Tピットと呼ばれる溝状の超長狭型の陥し穴が数十基列状に配置されるTピット猟がよく知られている（森田・遠藤 1984）。このTピット猟は、東北北部から北海道で発達し、陥し穴の形態的特徴と対象と想定されるシカ類の分布パターンから見て、シカを主要な狩猟対象とした毘猟であると考えられる（佐藤 1989）。

この縄紋の列配置には、通常長狭型（楕円形・長円形・溝状）の陥し穴が用いられるが、陥し穴猟が発達する前半段階では、まれに円形に近い楕円形の陥し穴が選択される例もある。しかしながら、このような陥し穴の場合は、底部施設が併置されることが普通である（田中他 1984）。

縄紋時代の陥し穴猟は、丘陵の緩斜面や沢の源頭部付近に、2~3基を単位として繰り返す、円形や円に近い楕円形・長円形・長方形の陥し穴を設置する組配置法を主体とする丘陵型の陥し穴猟が主体的に営まれ、段丘平坦面などでは列配置法による段丘型陥し穴猟がときおり付随する前半段階（縄紋草創期~前期，早期後半がピーク）から、次第に段丘型が主体となる後半段階へと移行したと考えられる。このように、配置場所の変遷（丘陵から平坦地へ）・陥し穴の形態の変化（円形・円に近い長円形等から長狭化した形態へ）・利用空間の輻輳化（周年単一的な空間利用から季節的な空間利用へ）等の時間的な変化から見ると、イノシシ等を目的としてはいるが基本的には多種の狩猟対象を想定していた前半段階から、次第にシカ類の罨猟での捕獲へと特化していった様相が、少なくとも東日本では基本構造であったと考えられる（佐藤 1989; 1998b; 2000b）。

したがって、これら二つの相違点は、季節性の確立した定住型の縄紋時代の陥し穴猟と、遊動型を基本とする旧石器時代の集団の陥し穴猟のシステムが相違することを反映したものと考えることができる。この違いは、おそらく、後者のシステムが、イノシシを第一としながらも他の動物も同じ程度に対象としていたことに起因するのではないかと思われる。なぜなら、イノシシに特化した陥し穴猟を実行するならば、イノシシの行動生態が劇的に変更されていない限り、縄紋期陥し穴に見られるように、沢の源頭等にできやすい「ヌタ場」（イノシシがのたくる場所）や緩斜面に形成される「トウ」（けもの道）周辺に集中して設置する組配置を選択するのが合理的と思われるにもかかわらず、列配置のみを選択しているからである。さらに、東京都四葉遺跡・静岡県初音ヶ原遺跡・同下原遺跡等で行われている陥し穴土坑覆土のプラント・オパール分析では、当時の周囲の環境はすべて草原状の開けた植生であったことを示しているが、これは本来森林棲とされるイノシシの棲息環境と矛盾している。

第Ⅲ黒色帯期の陥し穴がすべて深い断面形態を有することは、狩猟対象を生け捕りにしようとしたことを意味していると考えられる。確かに、イノシシの肉を食用とするためには、生け捕り後の素早い血抜きが重要であるという証言が、各地の現代の猟師たちから得られており（註8）を参照）、整合する。しかしながら、生け捕りの利点のうち忘れてはならないのは、見回り行動の効率化の観点にも見られる点である。くくり罨や重力罨のような殺傷型の罨猟の場合、血の匂いをかぎつけてやってくる肉食獣から獲物を守るため、ほとんど毎日の罨の見回り行動が欠かせないということが、罨猟の民族考古学的調査によって確かめられている（安斉・佐藤 1996; 佐藤 1996）。ところが、檻や陥し穴といった生け捕り型の罨の場合は、捕獲された動物自体が、しばしば自分自身を守る行動をとるので、弱るか餓死しない程度の時間の間隔で見回りすればよいことになる。

第Ⅲ黒色帯期の旧石器時代の人口がどの程度であったかは類推の範囲を出ないが、少なくとも縄紋期に比べれば、遙かに少なかったのではないかと予想される。しかも、空間を占有または優先使用していたとしても、それは縄紋期に比べれば、はるかに不安定なもの

であったらう。とすれば、見回り行動といった特定の生業活動への特化に許される時間と手間は、いっそう少なかったに違いない。

一見すると、はるかに手間がかからないように見える組配置を展開しなかった理由は、個人または少人数の狩猟集団という規模での安定した空間利用が達成されておらず、一定規模での狩猟集団を編成した上ではじめて空間の占有的な利用が可能であったためではないかと考えられる。集団狩猟としての列配置は集団の社会関係の中で可能であったが、移動を基本とする先史狩猟採集民にとっては、個人または小集団単位での個々の定着的な活動ははまだ許されていなかったと考えたい。

6 後期旧石器時代後半期—ナイフ形石器文化期

第Ⅲ黒色帯期に見られた地域的な陥し穴猟は、前半期終了とともに急速に衰退する。しかしながら、東京都四葉地区遺跡や神奈川県長井台地遺跡群等わずかではあるが、陥し穴猟は継続していたらしい。形態もすでに、円形だけではなく楕円形といったものも登場している。次の段階である後期旧石器時代後半期中葉（「砂川期」、Ⅳ層段階、「休場層」）では、ふたたび陥し穴の出現例は増加に転じる。分布は関東から九州までに広がり、特に静岡県下では検出例が多くなる。形態的には円形を基本とするが、楕円形・長方形の陥し穴も一定量含まれるようになり、すでに列配置は主体的な配置法ではなくなり、散在するような分布を呈する遺跡も多い。この中には、組配置によるものも含まれていると思われる（図1）。

この時期の陥し穴は、明確な特徴が少ないが、次の細石刃段階と第Ⅲ黒色帯期を連絡する様相を示すことは確かである。きわめてわずかな動きではあるが、縄紋型陥し穴猟への構造変動の胎動を感じ取ることはできよう。

7 後期旧石器時代末期—細石刃石器群期

旧石器時代末期の細石刃石器群期になると、東北から九州まで陥し穴が知られるようになる。その中でも南九州では、陥し穴が盛行する。これらの遺跡の知見は、最近の調査によってようやく明らかになってきたものばかりであり、未だ正式報告がほとんどないため、詳述することはできない。しかしながら、鹿児島県仁田尾遺跡では16基、宮崎県別府原遺跡では18基、同上ノ原遺跡からは26基¹⁴⁾の陥し穴の検出が報じられている。このうち、分布図が公開されているのは、仁田尾遺跡と別府原遺跡の2遺跡なので、それを検討したい（図5）。仁田尾遺跡の分布図は、陥し穴の配置がドットで示されているだけなので、形態別の検討を加えた上での単位性の抽出は困難である。しかしながら、それらが示されている別府原遺跡の例を検討する限りでは、どちらの遺跡とも、後期旧石器時代前半期の静岡

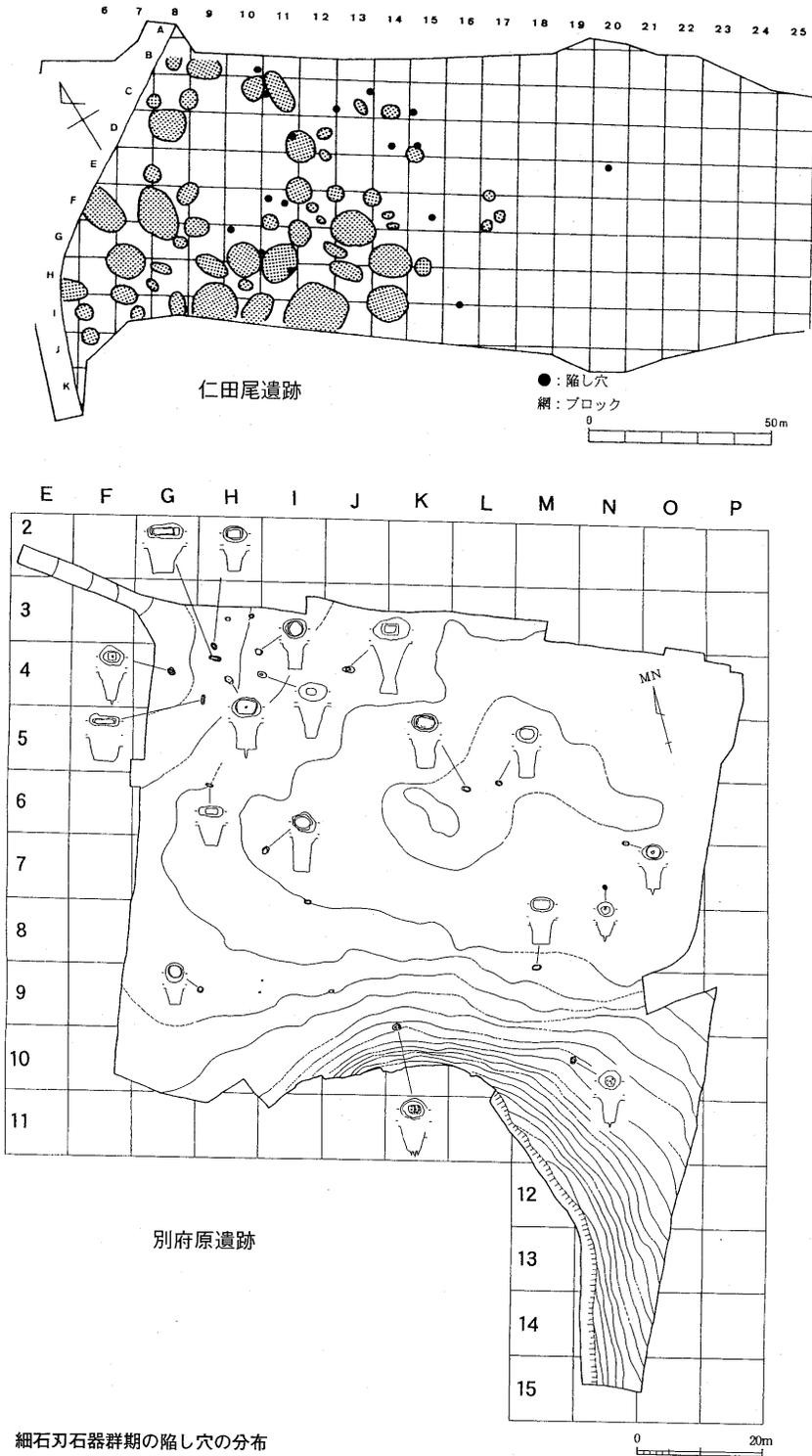


図5 細石刃石器群期の陥し穴の分布

県下の諸遺跡に見られたような、単純な列配置のみによって形成されているとは言い難い。むしろ、縄紋時代の陥し穴猟の前半段階に特徴的な「丘陵型」の分布特徴に近似している可能性が高い(佐藤 1989; 1990; 1998a; 1998b; 2000b; 2001)。「丘陵型」の陥し穴の分布は、2~3基を単位として、丘陵緩斜面や段丘面の同一地点(たとえば沢の源頭部付近)に、繰り返し設置する場合が多い。細石刃文化期の南九州では、すでに縄紋時代的な陥し穴猟が開発され始めたことを示すものと思われる。

組配置の開始は、個人または小集団単位での狩猟行動が可能となったことを示唆しており、狩猟集団の分節化を暗示している。

同時に、形態上の変化も大きく、円形だけではなく楕円形・長円形・長方形といった、溝状等の縄紋時代内で発生する形態を除いた縄紋期の基本形態の組成をすでに保有している。さらに、細石刃期では、縄紋期の陥し穴の特徴である底部施設を保有する陥し穴が、陥し穴総数の半数程度にまで及んでいることも注目せねばならない。逆茂木である底部施設の機能的意味は多々あるが、本来ならば這い上がることができないほど深く掘ることで生け捕りの効果を達成してきた陥し穴の底部に、狩猟対象獣の自由を奪う目的と考えられる逆茂木を設置することによって、排出土量の縮減を図ることが可能となることが重要である。個人または小集団単位での狩猟行動を指示する組配置の採用は、陥し穴構築面での作業量の低減を図る工夫とセットになっていたであろう。

8 縄紋期陥し穴猟への展開

細石刃石器群期にふたたび盛行した陥し穴猟は、すでに縄紋時代の陥し穴猟の基本的な性格を具備している。そのもっとも典型的な証拠は、縄紋時代草創期にいち早く定住型生業戦略の基本構造が内蔵されたと評価されている南九州(日本考古学協会 2000年度鹿児島大会実行委員会 2000)で認められる。縄紋時代草創期の南九州に出現した炉穴や集石といった生業遺構が、本州を北上するかのように時代的傾斜をもって分布を広げていく現象は、基本的には、温暖な完新世の気候環境とそれに連動した植生環境が漸進的に北へ広がるのに伴い、本州の在地の地域集団によって順次生業システムに組み入れられていったためと考えられるが、陥し穴も同様な過程をたどったのかもしれない。ただし、陥し穴の場合は、すでに第Ⅲ黒色帯期以来の陥し穴猟の伝統が保持されていたため、新規の技術流入ではなく、同一技術伝統上の革新として受容された可能性が高い。したがって、炉穴等の新出の施設とは異なり、急速に列島中に普及することとなったものと思われる。

ただし、北海道においては、本州以南の細石刃石器群とは異なる生業=行動戦略を有していた可能性が高いため、縄紋時代草創期には、いまだ陥し穴猟は行われていなかった可能性が高い。本州の旧石器時代の集団は、旧石器時代末期以降次々と新出の石器群を受け入れた結果めまぐるしく主要石器群がモザイク状に入れ替わるが、これは本州の旧石器時

代の人々が、一貫して地域分節化を指向しながらも、技術的には新規の技術システムを表現型としてつぎつぎと受容したためと考えられる(佐藤 1992)。一方北海道の集団は、寒冷気候と草原的環境の卓越という気候・環境条件のもとで、広範囲に移動する遊動型の資源開発=行動戦略を遅くまで保持していたと考えられる(佐藤 2000c)。こうした行動戦略は、陥し穴猟を展開する基盤とは著しく矛盾したものと考えられる。

従来旧石器時代の遊動的な生活から縄紋時代の定住生活への移行は断続的な段階的飛躍と考えられていたが、近年の考古学的成果では、むしろ漸進的な移行過程であった可能性が高いことが主張され始めている。それでも、その漸進的な移行のプロセスは、細石刃石器群以降の出来事と一般には理解されているが、本稿で明らかにしたような陥し穴猟の分析からすると、後期旧石器時代の早い段階からその胎動が見られ、すでに細石刃期には、縄紋化への本格的な傾斜が開始されていたことが明らかとなった。

註

- 1) これらのデータは、鈴木 1996a, 1996b, 鎌田 2000等をもとに、最近の知見を加味して集成した。宮城県中峯C遺跡(小川 1985) 101号土坑、千葉県木の根遺跡(宮他 1981)の例は、出土層位から見て縄文時代に所属する可能性が高いため、本論では除外した。また、宮城県中峯C遺跡 102号土坑、東京都鈴木遺跡(小川・角張 1993)、長崎県牟田の原遺跡(萩原 1996)の例は、形態的特徴から見て陥し穴とは判断しがたいため、これも除外した。
- 2) 陥し穴の底部に設けられた付属施設の総称。底部施設には大きく3つのタイプがあり、ひとつは径3~5cm程度の小さな穴(ピット)が、通常複数個設けられる。底面全体にランダムに設けられるものもあるが、普通は群をなして長軸方向に配列されることが多い。第2のタイプは、径5~10cm程度の中型のピットが設置されるもので、底面中央に1基設けられるものから、長軸方向に2, 3, 4...基と配列されるものまでである。最後のタイプは、底面に径30~50cm程度の大型の穴を掘り、その中にさらに第1のタイプである小ピットを配置するものである。大型の穴の数は、坑底中央にひとつだけあるものから、長軸方向に2ないし3基設置するものまでであり、4基以上設置することはまれである。もちろん、すべての陥し穴の底部施設がこれらのどれかに属するとは限らず、各タイプを併用するものもある。

細石刃石器群期に出現する底部施設は、第1および第2のタイプを主とするが、第3のタイプも、鹿児島県仁田尾遺跡から検出されているらしい(宮田 1995)。細石刃石器群期の陥し穴は、底部施設のあるタイプとないタイプの両者から構成されているようで、底部施設を有するタイプが多数を占める縄紋期とは、陥し穴の構成を異にしている。

ちなみに陥し穴の発達する縄紋期では、この底部施設の技術的・形態的区分に基づいて、配置の単位(=狩猟の単位)を抽出する事ができる。また、陥し穴の形態進化の特徴として、縄紋時代を通じて長狭化し大型化する傾向が挙げられるが、底部施設の数もこの傾向に連動して増加する。縄紋時代前半の陥し穴は、底部施設が底面全体をカバーするような変化を示すので、筆者は、これらの底部施設の役割は、多くの研究者の指摘する刺殺用の槍ではなく、捕獲対象の動物の動きを封じ込めるための逆茂木であると考えている。

- 3) 宮崎県別府原遺跡の陥し穴土坑の分布図(日高 1998: 117, 図3)等により判断したが、詳細は、

正式報告を待って検討したい。

- 4) 静岡県三島市初音ヶ原遺跡(鈴木 1998; 1999), 同下原遺跡(小野 1995; 岩崎 1998), 同焼場A遺跡(笹原 1994), 同加茂ノ洞B遺跡(横山 1996), 同八田原遺跡(笹原 1997), 同沼津市第二東名 no. 27遺跡等が該当する。
- 5) 土坑に関わる¹⁴C年代測定値は3つあり, 炭化材を試料として AMS 法 (accelerator mass spectrometry; 加速器質量分析) により測定された29750±210BPと, 土坑底部の覆土土壤そのものを試料として測定された22100±430BP, 24800±450BPである。第Ⅲ黒色帯は, 遺跡の標準土層の第20層に該当するが, 年代のよく知られている AT を含む層準(「ニセローム層」)は第17層にあたり, ATの年代値は, 他の多くの遺跡や露頭・海底堆積物等での分析の結果, 暦年代較正以前の値で現在24000~25000BPとされている。こうした理由から, 本論では, 29750±210BPの年代値を採用する。
- 6) この「休場層」の年代として, 従来休場遺跡の年代値14300±700BP(杉原・小野 1965)が知られていた。しかしながら, 報告者が想定する(伊藤 1999)ように, この初音ヶ原遺跡第Ⅰ文化層が愛鷹・箱根山麓編年の「第4期 b 段階」(シンポジウム実行委員会編 1995)に対比可能だとすれば, 神奈川県相模野台地の地域編年である相模野編年「段階Ⅶ」(諏訪問 2000)に対応する。同段階の遺跡の内, 各文化層にわたって連続的な測定をしている神奈川県月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅴ文化層の¹⁴C年代は, 15510±1060~15840±640BPと報告されている(相田編 1986; 樋泉・津村 2000)。ただし, これらの年代は, あくまでも石器群の推定年代であって, 陥し穴の年代とは正確には一致しない可能性があることは言うまでもない(Ono *et al.* n.d.)。
- 7) 植生から見ると, 約5万年前と約2万年前に寒冷のピークがあり, これは酸素同位体ステージの4と2にはほぼ該当する。ちなみに, 中間の温暖期は, 同ステージ3となるが, 第Ⅲ黒色帯期は, そのうちの後半段階に相当しよう。註13参照。
- 8) 愛知県東栄町下粟代で須藤によって報告されたイノシシの罾猟には, 柵罾とワイヤー製のくくり罾の2種があり, リリナーサーには, 東北マタギやロシア沿海州のウデヘ(佐藤 1996; 1998b; 1998c; 2000b)等世界の狩猟民にひろく観察される仕組みである, 小枝をキ字状に組んだ「ハジキ」を使用している。そして, 現在は使用されていないが, イノシシの陥し穴も報告された。須藤は次のように記している。

トウ(猪の通り道)には陥穴がいくつかある。陥穴は, 加藤さんの生まれる前からあるものだという。直径1メートル, 深さ2メートルほどのもので, . . . 穴の中はきちんと石積がなされ, 土が崩れないようにしてある。穴の上に蓋をするかのように枯草をおくと陥穴はできあがりになる。(須藤 1991: 196)

小枝を格子状に編み, 猪の足が中に浮いて抜け出られなくなるという方法もある。

穴の底部に尖らせた竹を立てておき, 落ちる猪の自重で刺すというものもあった。この方法だと猪はすぐに息絶えてしまうが, 猪肉を食するということからすると, 必ずしも賢明な方法ではない。猪は殺してすぐ内蔵を出さないと肉がまずくなるからである。できれば, 穴を深く掘って, 這い上がれないようにして生かしておき, 発見してから殺し, すぐ内蔵を出すのがよい。(須藤 1991: 200)

同様の石積み構造をもつ猪用陥し穴「シシオトシ」が, 長崎県西彼杵半島でも報告されている(立平 1997)。

- 9) 高知県長岡郡大豊町仁尾ケ内で香月によって報告されたイノシシ罾には, 吊り天井式重力罾「オシ」(「木の棚を吊り上げ, その上に多くの石を置き, 猪がエサを引くと棚が落ちて猪をつぶすし

- かけ」「現在の古老よりも、もう一世代以上前の人たちが多用していたらしい。」(香月 1995: 327頁)と、陥し穴(「穴を掘り、穴の上にハリガネで作った網を張る。ハリガネが入手しにくい時代は麻を使ったらしい。網を草木でふさぎ、そのそばにカライモをつるを取らずにつけたまま埋め込んでおく。猪はカライモをひとつひとつは掘り返さず、鼻の先ですっとすきかえして進んでいくという。その先で穴にはまるが、網があるため宙づり状態になる。」(同書: 328頁)があった。
- 10) 注9)で紹介した例以外にも、丸太を穴の中程に渡す(佐藤 1993)、逆茂木を仕掛ける(佐藤 1989)、特殊な木組を設置する(今村 1973; 鈴木 1983; 稲田 1993)等の仕掛けがある。
- 11) 「岩宿時代(筆者註: 旧石器時代)人は移動生活を繰り返しつつも、キャンプからさほど遠くない行動域内のそこそこに各種の罿を設置し、移動的な暮らしと罿の見回りとが両立するようなかたちで、攻めの狩りと待ちの狩りとを組み合わせつつ、狩猟の安定化と効率化を図った。」「後期岩宿時代、とくにナイフ形石器の普遍化するⅦ層段階以降、攻めの狩りとして穂先にナイフ形石器を装着した槍を用いた投げ槍猟が発達し、大、中型動物を対象とした狩りを行い、これとあわせてノウサギなどの小動物を対象にククリ罿などが常用されさらに、イノシシ、シカなどの中型動物に加え、小型動物も意識しつつ、陥穴も設置されたであろう。」(鈴木 1996b: 164)
- 12) ただし、春成は、第Ⅲ黒色帯期以降細石刃期までの陥し穴の衰退については触れていない(春成 2001)。
- 13) 深海底のボーリングコアから得られた酸素同位体比に基づく温暖/寒冷の振幅はステージをなしており、現在世界の更新世の考古学的資料を比較する時間スケールとして、世界的に採用されている。たとえば、完新世は酸素同位体ステージの1にあたり、その前の最終氷期の寒冷期(後期旧石器時代後半期)は同2に、この寒冷期の前の相対的に温暖な時期(後期旧石器時代前半期および中期旧石器時代後半段階)は同3にあたる。つまり、温暖期は奇数に、寒冷期は偶数に該当する。ところが、1990年代になって、グリーンランドや南極の氷床コアや深海底堆積物のコアの精密な分析が進むと、酸素同位体ステージで理解されていたよりもはるかに多数回にわたって激しい寒暖の振幅があったことがわかってきた。これをダンスガード・サイクルと呼んでいるが、この激しい気候変動は、日本海海底コアの分析でも確認されており、列島を含む地球規模での気候変動であると最近では理解されている(多田 1997)。註7参照。
- 14) 鎌田の集成では26基の陥し穴が検出されているとされる(鎌田 2000)が、略報では、旧石器時代の土坑は10基検出され、内5基は少なくとも底部施設を有する確実な陥し穴とされた(木本 1999)。その後本報告では26基と訂正され、底部施設のある15基以外にも、底部施設を有さない11基の内には分布上陥し穴と考えられるものが含まれると報告されている(木本 2002)。同報告で公表された分布図に拠れば別府原遺跡同様2~3基を単位とする「丘陵型」を示す。

文 献

相田薫(編)

1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和: 大和市教育委員会。

雨宮龍太郎

1997 「北総の猪垣」『研究連絡誌』51, 1-23, 千葉: 千葉県文化財センター。

安森政雄

2001 「『砂川』の時代背景と『砂川』石器群の構成—亀田論文と鈴木論文を読んで」『石器文化研

究』10, 23-26。

安斉正人・佐藤宏之

1993 「マタギの土俗考古学—岩手県沢内村での畀猟の調査」『古代文化』45(11), 15-26。

安斉正人・佐藤宏之

1996 「アキビラ猟の空間構造—岩手県沢内村での畀猟の調査」『先史考古学論集』5, 11-30。

大工原豊

1990 「AT下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論(1)—群馬県下の AT 下位石器群の遺跡のあり方を中心として」『旧石器考古学』41, 19-44。

1991 「AT下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論(2)—群馬県下の AT 下位石器群の遺跡のあり方を中心として」『旧石器考古学』42, 33-40。

藤井法博・今村敏照

1997 『鹿村ヶ追遺跡』入来：入来町教育委員会。

萩原博文

1996 「平戸の旧石器時代」『平戸市史 自然・考古編』pp.223-318, 平戸。

春成秀爾

2001 「更新世末の大形獣の絶滅と人類」『国立歴史民俗博物館研究報告』90, 1-52。

日高広人

1994 『垂水第1遺跡』宮崎：宮崎市教育委員会。

1995 「陥し穴(宮崎県)」『旧石器から縄文へ』pp.103-106, 鹿児島：鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会。

1998 「九州における細石器文化期の遺構について」『九州の細石器文化—九州島における細石器文化の石器と技術』pp.108-111, 宮崎：九州旧石器文化研究会。

2002 『南学原第1遺跡, 南学原第2遺跡』宮崎：宮崎県埋蔵文化財センター。

池谷信之

1996 『柏葉尾遺跡発掘調査報告書』沼津：沼津市教育委員会。

今村啓爾他

1973 『霧ヶ丘』東京：霧ヶ丘遺跡調査団。

稲田孝司

1993 「西日本の縄文時代落とし穴猟」『論苑考古学』pp.5-45, 東京：天山舎。

石川治夫

1982 『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』沼津：沼津市教育委員会。

Issac, B. (ed.)

1989 *The Archaeology of Human Origins: Papers by Glynn Issac*. Cambridge: Cambridge University Press.

伊藤健

1997 「D土坑」『菅原神社台地上遺跡』第1分冊, pp.220-223, 東京：東京都埋蔵文化財センター。

伊藤恒彦

1999 「第2章第2節第I文化層」鈴木敏中(編)『初音ヶ原遺跡』pp.25-194, 三島：三島市教育委員会。

岩崎しのぶ

1998 『下原遺跡Ⅲ』静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。

岩崎新輔

1997 『大久保遺跡他』出水：出水市教育委員会。

岩崎泰一(編)

1989 『勝保沢中ノ山』前橋：群馬県教育委員会。

上東克彦・福永裕暁

1999 『志風頭遺跡』加世田：加世田市教育委員会。

鎌田洋昭

2000 「南九州」『旧石器から縄文へ—遺構と空間利用』pp.223-254, 鹿児島：日本考古学協会
2000年度鹿児島大会実行委員会。

上村佳典・梅崎恵司

1987 『椎木山遺跡第2地点』北九州：(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室。

加藤雅功

2000 「人文地理学的環境」『夏梅木遺跡群』pp.549-574, 三島：三島市教育委員会。

キダー, J. E.・小山修三・小田静夫・及川昭文

1972 「国際基督教大学 Loc.15の先土器文化」『人類学雑誌』80 (1), 23-43。

木本 剛

1999 「上ノ原遺跡」『平成10年度東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』pp.6-9, 宮
崎：宮崎県埋蔵文化財センター。

2002 『上ノ原遺跡』宮崎：宮崎県埋蔵文化財センター。

木村有紀

2001 『人類誕生の考古学』東京：同成社。

香月洋一郎

1995 『山に棲む—民俗誌序章』東京：未来社。

前嶋秀張

1987 「初音ヶ原B遺跡出土の土坑について」『静岡県考古学研究』20, 13。

宮重行他

1981 『木の根遺跡』千葉：(財)千葉県文化財センター。

宮田栄二

1995 「陥し穴(鹿児島県)」『旧石器から縄文へ』pp.101-102, 鹿児島・宮崎：鹿児島県考古学会・
宮崎県考古学会。

森田知忠・遠藤香澄

1984 「Tピット論」『北海道の研究』1, pp.215-249, 東京：清文堂。

日本考古学協会 2000年度鹿児島大会実行委員会

2000 『旧石器から縄文へ—遺構と空間利用』鹿児島：日本考古学協会 2000年度鹿児島大会実行
委員会。

野尻湖発掘調査団

1997 『最終氷期の自然と人類』東京：共立出版。

小川出

1985 「旧石器時代の遺構」『中峯遺跡発掘調査報告書』pp.81-82, 仙台：宮城県教育委員会。

小川望・角張淳一

1993 「鈴木遺跡農林中央金庫地点検出の旧石器時代の“土坑”」『東京考古』11, 20-22。

Ono, A., H. Sato, T. Tsutsumi and Y. Kudo

n.d. Radiocarbon Dates and Archaeology of Late Pleistocene in the Japanese Islands.
Radiocarbon 43(3) (in press).

小野真一

- 1993 「先史時代の陥し穴について— 静岡県を中心に」『伊豆韮山カントリークラブ地内遺跡群』 pp.79-107, 沼津：加藤学園考古学研究所。
- 小野真一・秋本真澄
- 1994 『久根ヶ崎遺跡』沼津：加藤学園考古学研究所。
- 小野千賀子
- 1995 『下原遺跡Ⅰ』静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 佐川正敏
- 1986 「旧石器時代の遺構」「旧石器時代の陥穴状土坑の検討」『東北大学埋蔵文化財年報』2, 83-95。
- 佐口節司・室内美香
- 1995 『平成6年度梵天古墳群・匂坂中下4遺跡発掘調査報告書』磐田：磐田市教育委員会。
- 笹原芳郎
- 1994 『焼場遺跡A地点』静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 1997 『八田原遺跡』静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 佐藤明生
- 1990 『長井台地遺跡群』横須賀：横須賀市教育委員会。
- 2002 「横須賀市打木原遺跡」『第8回石器文化研究交流会発表要旨』pp.13-16, 山梨：やまなし実行委員会。
- 佐藤宏之
- 1989 「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』pp.37-59。東京：六興出版。
- 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』東京：柏書房。
- 1993 「罨猟における誘導柵の使用例とその民族考古学的可能性」『法政考古学』20, 23-42。
- 1996 「狩猟システムのエスノアーケオロジー— ロシア沿海州ウデへの民族調査から」『古代』102, 15-35。
- 1998a 「陥し穴猟の土俗考古学— 狩猟技術のシステムと構造」『縄文式生活構造— 土俗考古学からのアプローチ』pp.192-221, 東京：同成社。
- 1998b 「罨猟のエスノアーケオロジー— 過去と現在の架橋」『民族考古学序説』pp.160-176, 東京：同成社。
- 1998c 「後期旧石器人の社会はどう変化したか」『科学』68(4), 337-344。
- 1999 「西南日本における中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行— 宮崎県後牟田遺跡発掘調査の中間報告」『早水台から上高森まで— 世界から見た日本列島の前期・中期旧石器研究』pp.73-78, 仙台：東北福祉大学。
- 2000a 「罨猟とマタギ— 土俗(民族)考古学の射程から」『東北学』3, 114-129。
- 2000b 「北方狩猟民の民族考古学」札幌：北海道出版企画センター。
- 2000c 「日本列島後期旧石器文化のフレームと北海道および九州島」『九州旧石器』4, 71-82。
- 2001 「縄文時代の陥し穴猟」『考古学ジャーナル』468, 13-16。
- 佐藤宏之(編)
- 1998 『ロシア狩猟文化誌』東京：慶友社。
- 佐藤宏之・田口洋美
- 2001 「信州・秋山郷のクマの陥し穴」『法政考古学』27, 1-17。
- 佐藤孝則
- 1986 「動物生態学からみた溝状ピットの機能」『北海道考古学』22, 107-131。

シンポジウム実行委員会 (編)

1995 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』 静岡：静岡県考古学会。

静岡県埋蔵文化財調査研究所 (編)

1996 『下原遺跡Ⅱ』 静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。

須藤 功

1991 『山の標的— 猪と山人の生活誌』 東京：未来社。

杉原荘介・小野真一

1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3(2), 1-33。

諏訪間順

2000 「『砂川』の時間的枠組みと前後の変遷」『石器文化研究』9, 15-22。

鈴木忠司

1980 『寺谷遺跡』京都：平安博物館。

1996a 「岩宿時代の陥穴状土坑」『下原遺跡Ⅱ』pp.109-146, 静岡：(財)静岡県埋蔵文化財研究所。

1996b 「岩宿時代の陥穴状土坑をめぐる二三の問題」『下原遺跡Ⅱ』pp.151-166, 静岡：(財)静岡県埋蔵文化財研究所。

2001 「岩宿時代の槍と陥し穴」『考古学ジャーナル』468, 5-8。

鈴木敏中

1992 「旧石器時代の土坑— 箱根山西麓の遺跡から」『考古学ジャーナル』351, 14-18。

1998 「初音ヶ原B遺跡第1地点」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ』pp.1-54, 三島：三島市教育委員会。

鈴木敏中 (編)

1999 『初音ヶ原遺跡— 初音ヶ原A遺跡第2地点, 初音ヶ原B遺跡第3地点』三島：三島市教育委員会。

2000 『夏梅木遺跡群』三島：三島市教育委員会。

鈴木雄三

1983 『赤沼遺跡』郡山：郡山市教育委員会。

多田隆司

1997 「ダンスガード・サイクル」『科学』67(8), 597-605。

高橋信武

1994 「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』pp.1-45, 熊本：龍田考古会。

田中純男・岩橋陽一・斉藤進・小島正裕

1984 『多摩ニュータウン No.470遺跡』(多摩ニュータウン遺跡— 昭和58年度(第7分冊)), 東京：(財)東京都埋蔵文化財センター。

立平 進

1996 「近世以降の猪垣」『考古学による日本歴史』2, pp.166-173, 東京：雄山閣出版。

1997 「猪・垣・人」『人間・遺跡・遺物』3, pp.497-510, 千葉：発掘者談話会。

手塚 均・小川 出

1986 「支蔵遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』pp.117-126, 仙台：宮城県教育委員会。

樋泉岳二・津村宏臣

2000 「遺跡の放射性炭素年代と歴年代」『日本先史時代の¹⁴C年代』pp.59-90, 東京：日本第四紀学会。

富樫孝志

1998 『高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡』静岡：(財)静岡県埋蔵文化財研究所。

辻本崇夫

1996 「岩宿時代以降の陥し穴の変遷とその背景」『下原遺跡Ⅱ』pp.147-150, 静岡：(財)静岡県埋蔵文化財研究所。

ウォーカー, A.・シップマン, P.

2000 『人類進化の空白を探る』河合信和訳, 東京：朝日新聞社。

渡辺仁

1985 『ヒトはなぜ立ちあがったか』東京：東京大学出版会。

1993 「土俗考古学の勧め」『古代文化』.45(11), 1-14。

2001 『縄文土偶と女神信仰』東京：同成社。

山下秀樹

1989 「先土器時代の土坑」『考古学の世界』pp.203-226, 東京：新人物往来社。

山下秀樹(編)

1985 『広野北遺跡』京都：平安博物館。

横山秀昭

1996 『加茂ノ洞B遺跡』静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。

横山秀昭・伊林修一・富樫孝志

1996 「静岡県下の陥穴状土坑」『下原遺跡Ⅱ』pp.15-50, 静岡：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所。

依田賢仁・大木幹夫

1999 「陥穴状土坑」『四葉地区遺跡 平成八年度 [旧石器時代編]』pp.244-248, 東京：板橋区四葉遺跡調査会・東京都建設局。

吉牟田浩一

1998 『平成9年度東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』宮崎：宮崎県埋蔵文化財センター。

2002 『新屋敷遺跡』宮崎：宮崎県埋蔵文化財センター。